分枝

branching
http://www.hmp.jp
branching 23-26 ,publish : 20,September.2018

氷の上F40 / アクリル・水彩紙パネル

日記 (2018 年 5 月 20 日)

Yoshiaki HIKITA 1994-
疋田義明

街を分断するように流れる川。そこにかかった橋の上を自転車で走っていました。川の上流へ目を向けて行くと、遠くに黒く山肌を見せながらもまだ先端を白くした山々のギザギザが見えました。そんな川の周りの形が少し変化していました。雪解けの水でしょうか、川幅が広がっていました春の始めのあたり。そこから徐々に陸地が増えていました。少し前までその土の上には何も生えていないように見えていましたが、もう小さな木々蕾にまみれ、緑の古四のカーペットになっていました。何が何から分からなく絡まりあってしまい、緑に燃えているように著苦しいようでした。この時期になります、川の周りの木々に、白く細かな花やら綿毛やらが点々と緑の中に見えてきます。その綿毛が風に流され橋の上を飛んできます。年によって飛んできます量が変わりましてひどいなは、橋の上を自転車で行きますと頻繁に顔にぶつかってきます。ついでに無い修速を、ぶつかって死んでいきます。今年はそんなこともなく、ほっとした今日この頃です。

刺客の巻貝圖

Kazunori KITAZAWA 1949-
北澤一伯

『いちばん最初の人たちは言っている。眠らないようにするために、この天空の支持者は、胸による道を通じて、自分のこの内側と外側を行き来している。昔のことについて教える人たちは言っている。この天空の支持者は、男と女に言葉や書記法を教えたという。というのは、言葉が世界を歩むなら、邪悪なものは静かになり、この世界が正常になるからである。こんなふうに言われている。

それゆえ、眠らないもの、邪悪なものがおこす悪事に備えて待機しているものの言葉は、一方から他方へ直線的に歩むことはない。この中にある針路にそって自分の内側にむかって歩み、理性の針路に従って外にむかって歩むという。

昔の知恵者たちは言っている。男と女のくは巻貝の形をしている。よい心と考えるものもは、こちら側からむこう側へむかって歩んでいる。こうして、世界が正常であるようにいつも待機するため、神々や人間たちを起こして回っている。ほかの人たちがいつ眠っているかを見守る人たちは、巻貝を使っている。

巻貝を使う目的もたくさんあるが、何よりも忘れないようにするためである。』

(『老アントニオのお話　サバティスタと叛乱する先住民族の伝承』マルコス副司令一著　現代企画室　252〜253ページ)

この言葉とともに、老アントニオは一本の枝で地面に何かを描き、その場を立ちある。しばらくして、書記役の「私」は太陽の光の下に描かれた図面を見るのである。そして、彼は描かれた図に言葉を与える。

『はっきりと線で描かれた螺旋、つまり、巻貝だった。』(『同』253ページ)

世界を歩む言葉。それは、「巻貝」である。

そして、その日の昼礼には、このようなマヤ先住民の神話的世界の話を交感させつつ、サバティスタの「私」のかかわる委員会は、国内外の市民社会との交流の場としての旧来のシステムを廃止し、新しい機能を有する巻貝の統治評議会の組織持えを決定するのである。

では、サバティスタとはなにか。

サバティスタ民族解放軍(Ejército Zapatista de Liberación Nacional,EZLN)は、メキシコで最も貧しい州とされるチアパス州を中心に活動するゲリラ組織。サバティスタはウェブサイトを介して世界的な支援を受けている。

参照：Wikipedia『サバティスタ民族解放軍』

日本の公安調査庁のホームページには次のように記されている。

『サバティスタ民族解放軍(EZLN)は、1983年11月に設立された。勢力は千数百人規模とされる。北米自由貿易協定（NAFTA）に反対し、チアパス州内における先住民の差別や貧困問題の解消を主張している。』

参照：日本／公安調査庁のホームページ

パソコンで検索をすると、サバティスタは、彼らの拠点「オベンティック」のことを「Caracol(カラコル＝カタツムリ)」と呼んでいるという。建造物の壁に描かれた蝸牛の壁画。なぜ蝸牛が描かれているのかという日本人の見学者の問いに対してサバティスタの女性案内人はこう答える。

『LENTO PERO AVANZO－ゆっくり、だけど前へ進む～』

参照：脳内トラベルメディア世界新聞「メキシコのちょっと変わったテロ組織「サバティスタ」の拠点を見学してきた。」

サバティスタに関わる「老アントニオのお話　サバティスタと叛乱する先住民族の伝承」という書物の名前を正確に知ったのは、昆野生士氏判の螺旋階段を付設するアイビーハウスの四階にある「からこる坐」での朝食の打ち合わせの時である。五年前、このビルの一階にブックカフェ「まいまい堂」がオープンするにあたって手渡されたリフレットにも、同様の内容のスクロールが挟まれてあったと思う。その時、友人を介して看板を依頼され、店の名前の「まいまい」の由来を聞いた時がサバティスタの巻貝＝蝸牛への思想に触れたきっかけだったか、やや記憶があいまいになっている。しかし、看板とは別の重要ななにかを伝えられたと感じたことは忘れてはいない。

刺客の巻貝圖　部分（パベルと第三インターナショナル記念塔）
2018年5月　場所の仕事ⅱ　刺客の巻貝圖
ふたつの椀　底面　ガラス
長野市 上千歳町　アイビーハウス　4F　からこる坐
「からこる台座」の設置　思考の布置

はっきりしない何かにこだわったまま、依頼された看板の仕事を遅延させつつ、蝸牛の殻を拾って歩いていた。二年ほど前に見た、スウェーデン中部の都市ウプサラ近郊の森の中の廃墟の鉄路の野草に、延々とぶら下がる星の数ほどの蝸牛の交尾の列を思い出し、不定形の情念に立ち尽くしていた。実際に、一昨年まで、蝸牛数匹を仕事場で飼っていたのだった。

あの時、伝えられたと感じたことは、地方における純粋美術の相拠の在処についての、模索の教唆ではないかと憶測して素描を重ねていくする。、武装蜂起ゲリラ組織サバティスタと老アントニオについての関係に触れ、都市のマルクス主義と先住民の土地の世界観の融合する「お話」は、今日に至る私の制作とパラレルに共振し、制作とは、私の出生地の農村集落と私の出自に対する美術的な解釈だったことに納得がいき、これまで関わってきた固有の土地を、彫刻の思考で固有の場所に変容させる仕事に、更新されべき意味が付与されたと感じることがあった。

仕事の場所である「からこる坐」の「坐」の意義表はいろいろな物を置くテーブルのことである。床に置かれた現実的な物をテーブルに置きかえるだけで、現実は質的に変化する。意志して物を置くこと。つまり、布置とは表徴のことである。さらに、「坐」はすわる事を意味し「座」はすわる場所を意味するという。

彫刻史における、彫刻の台座の意味も「座」の理解によって、いくつかの変容の経過があったことを素朴に受け入れたいと、私は思う。例えば、アンソニー・カロは、彫刻そのものを床に置くことで、場所性や空間との関係性を意識させ、ギルバート・アンド・ジョージの「リビング・スカルプチャー」は、彼ら自身が彫刻台座に立ち、彫刻の形式の中に彼らの芸術観を成立させ、行為が彫刻の文脈表現として認識されるように企画されていたことを、私は知っている。

そうした台座観をたたき台にし、場所との呼応において、布置可能、移動可能、分解可能な機動力をサステナブルという方向の延開で、彫刻台座への思考を「彫刻における台座の意味」に絞り込み、「からこる台座」と命名し、「台座」を布置する労働として「からこる＝蝸牛が坐る場所」を出現させようと企てる。すると場所には、その名前と彫刻史観が柔軟な彫刻論として蛻回していく。

サバティスタの経過を理解するにつけ、その思索から刺客のような使気を連想するのは、悪意を発動して、直線的に進み、おのれの嘘を隠蔽する新自由主義的左翼方側言論群への反感である。

多数者側の巧みな言い回し、連発する虚言、冷酷さ、無視、無慈悲な土地破壊、書記法を誤り改竄しつつ、あまりにもグローバルな言葉を語る人の裏側の表情にある醜悪が、私には通俗的カルトに観える。そこに共感するそれぞれが、それぞれの綺麗な言葉を語る個人的政治性を待っていると、狂信の表情の共通項は語るのだ。

彼等。その奇妙な薄笑いの顔に眼をひけることで、感じる、綺麗な言葉を語る世界観の表情や身振りのこなし方を観てとることの苦痛に、私は耐えているのである。

経済優先の彼等は、この正当性を主張する事に明らかに呪われているのようである。共同して真実を語る口非を封じ、それを否定される事を前に拒んで、本来の正しさを黙殺する。違法ではないと強弁することは、脱法的に悪質為る。彼らの綺麗な言葉によって正しさが黙殺されるという事態を受けとりつつ、彼らの黙殺の植のひと突きから、私自身の自滅を防ぐものは何であるのだろうか。

唯一の道は、今ここで、自分の内部でそのような言葉の顔れを童息させることだと、錆び鉄を研ぎながら考える。

同時に、その邪悪性に刺れ ・・それによって破滅し、しかしなお、なぜか破滅せず・・ある意味では殺されれるすが、それでもなお生きつづけ、屈服しない、という精神が活きている情景を思い浮かべる日々をすごすのである。

『そう、巻貝は、共同体の内部に入るため、そして共同体が外部に出ていくための門のようなものである。内側に向かってわれわれ自身を見つめるための窓、そして外側を見る窓のような物である。はら貝のように、我々の言葉を遠くまで投げだし遠くにあるものの言葉を聞くための物である。なんというても、世界に数多ある世界が正常であるように、われわれが見守り移動すべきことを忘れないよう銘記させるためのものである。』

(『チアパス、第十三石碑―巻貝の創設』2003年7月26日」)（「同」254ページ）

巻貝圖は究極的で終わりを示さない弾機である。どこからでも始めることができる決して終わらない。そして、忘れないための場所に於いて構築されるべき思考の物質。永続に向てひとつとして同じもののない円為る。

[引用・参考文献]
マルコス副司令著『老アントニオのお話　サバティスタと叛乱する先住民族の伝承』現代企画室　2005年
マルコス／イボン・ル・ボ　著『サバティスタの夢　たくさんの世界から成る世界を求めて』現代企画室　2005年

北澤一伯 Kazunori Kitazawa
1949年長野県伊那市生れ

1971年から作品発表。74年（台座を失なった後、台座のかわりを、何が、するのか）彫刻制作。80年より長野地区、（場所）展を下ノ沢ギャラリー（現鶴地（いとうち）制作）。94年以後2008年12月までの約14年間、廃屋と旧家の内部を「ここの内部」に見立てて美術空間に変える「行」をめぐって　若人たちさそき、連作を制作。同期間、長野県安曇野地高に、ある民家に住みながら、その家の内部を「ここの内部」の動きに従って改修することで、「ここの場」をトランスフォームさせる「行」の連作「残存の家」を制作。
その他、彫刻制作の手法と理論による「脱構築」連作として
1998年下伊那郡高森町「本島甲子郎邸36時間プロジェクト」がある。地域美術界に対する新解釈として「いばるな物語」連作。
戦後の都市近郊に於ける農業事情を通じて「植林空間」。
また、生家で体験した山林の植界や土地の権利をめぐる問題を、「焼（ たかい）論」として把握し、CISと物質化を試みて、レコンスタク（夫地軍蘭／金で冬光った場所で、もう一度たいせつなものをとりもどす）プロジェクトを持続しつつ。
95年NIPAF（95に参加したセルジ／ペイ（仏）のパフォーマンスから受けた印象を展開し、03年より「セルジ／ペイ連歌シリーズ」を発表している。2009年9月第1回阿沢ビエンナーレ美術展に出品。
4th 初めて美術館 2009アート ゆつちざわ土庫（岩手県花巻市）
2012年6月「地上芸術祭城連No5　刺客の風景」（風野見伊那北高校裏ヶ丘会館）
7月「くりかえし対立する世界で白い壁はくりかえしあられる 宿有時と宿有地」連作 No7（長野市松代大本営地下壕跡）
2015年 Nine Dragon Heads(（韓国）のメンバー企画として第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展に出展。
同年7月、Nine Dragon Heads に参加。韓国水原市に VOID house(なにもない家）を制作した。
2016年6月「いばるな物語」連作の現場制作。　伊那北高校裏ヶ丘会館
2016年10月個展「 段丘地 四感 折草 平野」アンフォルメル中川村美術館（長野県上伊那郡中川村）
2017年9月 Nine Dragon Heads(（韓国）の TASTE of TEA の企画として第15回イスタンブール・ビエンナーレに Void house 連作を制作。
2017年11月-12月 ナガノオルタナティブ 2017 「Prevention」05 北澤一伯展 「場所の仕事」にて
“光の芯” を現場制作。
FLATFILESLASH/ Warehouse GALLERY
（長野県長野市）
2018年5月個展 「場所の仕事　Ⅱ　刺客の巻貝圖」 からこる坐（長野県長野市）
2018年8月 Nine Dragon Heads(（韓国）の企画 「Beyond the Horizon」に参加。第 33 回サンパウロ・ビエンナーレ国際中展示予定。

現在　徐句国（「銀漢」同人

103116 / Digital Photograph by Tetsuya Machida

漆黒ノ金

Tetsuya MACHIDA 1956-
町田哲也

雪が消えた道端見た福寿草に魅惑され、二日三日と転落し幾度かまたは降ったこの以上の深雪が昼夜で成す日々。自宅が、ドッシリとされるかに眠り返される気象で、早々に山が一斉に萌えて芽吹き季節に腰を抜かされ、ティマニズム（表現の言葉）は狂って成長散った。新緑が雨に濡れて葉色が深くなったっも冬まで枝は続く。徐々に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべく自然に変化するこれまでの穏やかな移ろいが冬の、はなるべ

金色（こんじき）の光を反射する煌めきの神々しさとは、誤われるような金属物質そのものには日頃馴染みない生活でも、古の自録や絵画の画像を眺めたり、黒漆種族の皮膚に張り付く輝きを遠く想うことはある。それと同様の感覚なって、金魔のような、ことがあって、しまって、解釈の崩壊の気配が、目覚めの中の、「金魔」の、「赤子の類」に、ぶつかるように、ぶつかるように、ぶつかるように